11/18　鎌倉生涯学習センター開催分ご意見・ご感想

No.	意見・感想
1	・30,000t/年は、今泉CCの代替能力? ・将来の名越CCの処理能力の算定は?　⇒　ごみの発生量は、簡単には下がらない。将来のこと。 ・名越と新焼却炉の関係が説明なし。 ・学習の研修施設は、開所当時は良いが、10年程度で一巡すると利用率が下がり、無駄になる事例が多い。路線バス等の公共交通が必要 ・余剰熱量を地域に配るのは無理。施設内が原則 ・パッカー車は炉の修理等での他地区への移動を考えると、全電動は無理 ・可燃ごみ単独か、資源ごみとの複合かの説明がない。 ・10年は短い。各種のアセスのリードタイムを考えると厳しいのではないか。 ・市民に夢を言い過ぎると後でトラブルが発生する。あれもこれも書くと、後でもめることが多い ・技術の判るメンバーが補助説明したらいかがですか。 　　・ダイオキシンの説明 　　・最終処分場の説明 　　・バイオマスの件 ・情報制御すべきNETで議会の様子等も見れる。各会議の情報がまとまらないままで市民に流れる。
2	・根本にゴミ感謝（生命を支えて下さった食物の終末、糞尿、ゴミ）の心を持ちましょう。子ども達には小さい頃から教えてあげましょう。 ・その教育センターを施設と併設して下さい。 ・観光都市を充実させて、観光ルートの一部に組込み、観光サービス（トイレ、休憩、かまくらグッズ売店）を提供できるように、施設迄の自動車道路を立派に設定してシャトルバス等運行できますように、他市からも絶えずお客様が、リピーターも希います。 ・自然、保護、整備の当然保たれると考えます。 ・ゴミ→付加価値を自然、人類、地球に
3	1、配布資料、説明共に判り易く、良かったと思う。 　→　迷惑施設ではなく、複合施設の導入も視野に入れた新しい都市計画、まちづくりの一つとしてランドマーク的な基本コンセプトの強調が必要ではなかろうかと思う。 2、基本方針（コンセプト）について（5つの基本方針の説明） 　当然のことであり、全国に存在する稼働実績でも証明されている。 　最新の技術の導入を図る　→　強調しすぎ（目新しいことではない） 　→触媒反応等ー触媒剤の処理はメーカー引取り処理？ 　→エネルギー消費の少ない施設 　　（例）高効率モータ、インバータ制御などの採用、電源（低圧、高圧、DC、照明、生業等）非常停止後の再稼働（100%負荷）の検討は十分ですか？ 3、コンパクトで機能性の高い施設 　→搬入ピーク時の車両の待機スペースの確保？　搬出入車両の出入口の配置を工夫 　→計量トラックスケールと車両管理システム？　一般（有料持込み）車の取扱い 4、附帯設備、施設 　　特に貯水池、調整池、中和施設等、十分に検討して欲しい 5、煙突、飛行制限区域の誓約の有無？
4	ごみ施設はNIMBY施設と言われるように、必要不可欠でありながら人々から嫌がられてしまう施設です。 嫌なモノを、どこかの場所におしつけるのではなく、どのような工夫で、嫌な施設というイメージを払しょくできるのかということをもっと深く考えるべきです。 本当に事例研究はしましたか？（資料には、県内の事例のみでしたが） プログラム（発電、足湯など）での解決をはかろうとするのではなく、建築的に解決も検討してもらいたいです。 広島市環境局中工場など、成功している処理場もあるので、参考として下さい。
5	「ごみ焼却施設に関する概要」、「新焼却施設の取り組みについて」の何れも明快に説明されており、高く評価致します。ただ基本的なところで意見（異見）があります。それは次の通りです。 1．これ以上燃やすごみの量の削減を市民に求めるのは止めて欲しい。もう限界に来ている。現在のﾚﾍﾞﾙでも対応できるよう施策を考えるべき。 2．新焼却炉の稼動開始時期を10年後でなく、もっと早めるべき。 3．新焼却炉の能力は3万トン/年でなく、もっと大きくすべき。 以下にその理由を述べます。 1.これ以上燃やすごみの量の削減を市民に求めるのは止めて欲しい。もう限界に来ている。現在のﾚﾍﾞﾙでも対応できるよう施策を考えるべき。 今までは今泉と名越を合わせて年間36,600トンを処理していたが、今泉の休止に伴い処理能力は30,000トンに減少し、能力は6,600トン不足する。このうち2,000トンは有料化で対応する見込み。それでも4,600トンが不足するので、市民には更なる協力を求めるとの説明であった。 今泉が使えなくなることはず一と前から判っていたのに然るべき対応を採らなかったためにこのような事態に至ったことは間違いない事実。自らの失政のつけを、有料化など 一方的に市民に押し付けるのは納得が行かない。不足の能力分は近隣の自治体に（有料で/ 輪番の約束で）処理を依頼するなどの対策を取るべきではないか。 我々も分別を徹底するよう努めるが、分別には限界がある。残業、残業で寝る時間もろくに確保できないような非正規労働者や、仕事で世界中を飛びまわっている若者に細かく分別を求めるのは元々無理がある。ある程度の混入があるのは止むを得ないとして、システムを構築すべきである。一人者の多い地域で分別が徹底していないからとて、有料化で分別の徹底を図る、或いはｺｽﾄを負担させるというのは間違った方策である。ごみは殆ど減らない。 また、ごみの量を減らすために「水切りの実践」を勧めているが、身の毛のよだつようなことである。生ごみは、魚のはらわた、肉の脂、腐ったものなどあらゆる汚物が集まったもの。これを水切りのために絞れとは如何に何でもひど過ぎる。不衛生極まりない。人間の感覚を全く無視したこと。このような例示・指示は即刻取り下げるべきである。 分別に費やす時間的、肉体的、精神的負担は最小限にして、これ等をより生産的な方向に向かわせるのが、生き生きとした社会を作るのに必要で、社会全体として取り組むべき方向である。 2．新焼却炉の稼動開始時期を10年後でなくもっと早めるべき。 来春で焼却炉の能力が足りなくなると云うのに、何ゆえ新炉の稼動開始時期を10年後とするのか。可及的速やかに新炉を稼動させるべきであろう。上記のような異常な負担を市民に10年間も負わせ続けることになるではないか。10年後とする特別な理由があるのか？ 3．新焼却炉の能力は3万トン/年でなくもっと大きくすべき。 今泉と名越の現在の能力が36,600トンで、現在ﾊﾞﾗﾝｽしているならば、人口の変動が10年間ないとするならば、単純に考えれば新炉の能力は36,600トンとすべきであろう。何故能力を減らすのか。この種設備の建設費は能力を2倍にすれば2倍になるというものではない。昔から0.6乗の法則というのがあって大きくすれば割安になる。将来処理ごみの量が何らかの理由で増えることがあってもよいように、大きめに作っておくのがベター。近隣の自治体と広域連携で相互にごみ処理を融通しあうことも視野に入れて柔軟に考えるべきである。新焼却施設は例えば2炉方式（19,000トン/年x2）として、名越が動いている間は1炉のみを稼動させ、名越が休止の後は2炉を稼動させることも考えては如何か。 36,000トンに据え置く理由を知りたい。 4．新焼却炉はｴﾈﾙｷﾞｰ回収炉とすべき。 上の1．で述べたように分別には限界がある。プラスチックなどある程度の混入があっても資源が無駄にならないように、新炉は熱回収を徹底させるべき。熱・電気などｴﾈﾙｷﾞｰとして回収すれば混入したプラスチックなども立派に資源化されていると見做すことが出来る。しかも分別のための労苦やｺｽﾄも回避できる。欧米ではこのような考えから、(分別しないで)焼却し、熱・電気を回収している炉が沢山ある。これが試行錯誤を経た上での結論である。